

## 一生懸命と一所懸命の違いから考える選手育成

辞書にはこう書いてある。『一生懸命の語源・由来は、「一所懸命」が本来の形である。一所懸命は、中世の武士が先祖伝来の所領を命懸けで守ったことに由来し、切羽詰まった状態にも使われた。近世以降、「一所懸命」は「命懸けで何かをする」と言った意味だけが残ったため、「一所」が「一生」と間違われて「一生懸命」となり、発音も「いっしょけんめい」から「いっしょうけんめい」に変わった。』と。

両方の言葉の語源・由来は考えず、単純に**一生懸命**を「命がけで物事をする。全力をあげて何かをするさま。」そして、**一所懸命**を「人が、生活のすべてをその所領にかけること。」として、サッカー選手（の育成）について考えてみた。

一生懸命は「試合全てにおいて全力を使う、ひいては攻守ともに献身的にプレーする。」

一所懸命は「一生懸命より少し、ポジションによってプレーの頑張り具合に優先順位があり、自分のポジションに求められる主たる役割に120%を求め、それ以外を、80%くらい（少し手抜きする）でやる。」

これを読んでくれている皆さんは「一生懸命な選手」と「一所懸命な選手」のどちらを支持しますか。また指導者の立場として望ましい育成はどちらだと思いますか？

個人的見解でタイプを分類します。もちろん選手の分類基準は、所属チームの求めている部分が見えていだけで本来の選手の質とは異なるかもしれませんが・・・。

「一生懸命型」・・・岡崎、オスカー（ブラジル代表）、ロッペン（バイエルン）、イニエスタ（バルサ）・エトー・サバレタ（マンC）、ルーニー（マンU）、中山（ゴン）

「一所懸命型」・・・本田・メッシ・ロナウド（元ブラジル代表）・カッサーノ・Cロナ・三都主（古い？）

一般論から言うと、運動量豊富な選手（遅筋系）には一生懸命が、運動量が少ない選手（速筋系）には一

所懸命育成と位置付けられてしまいますかね。また FW は一所懸命タイプが多い。勿論その分類は当たり前のことかとおもいます。では別の観点から考えてみたいと思います。

日本の選手育成の指導者のスタダードは、「一所懸命型」の選手がスター気取りでいることを承伏できず、一見地味に見えるも「一生懸命型」の選手に理想の育成像を重ね合わせてしまう。今、教えている選手たちに一所懸命型の選手タイプを認めてはいけない・・・と。この国の場合、指導者が学校教育の人間であることが足かせに？小次郎を育てた吉良監督タイプは少ない（笑）。

得意なことばかりを頑張る選手を、われわれ育成指導者の多く（教育者）は「わがまま」「自己中心的人間」

として、捉えてしまう傾向があるかもしれません。しかし得点を取ることだけに懸命になり、結果点を取ってチームの勝利に貢献する選手なら「あり」と言うのがプロスポーツの世界なのかもしれません。ある意味その分野のスペシャリストであることがトッププレーヤーとしての成功条件と言えそうです。ワールドカップでもメッシもネイマールもCロナでさえ守備はほとんどしていないも同然です。（コース限定くらいはしているかぁ・・・ファンに知れたら怒られそう）

持論を展開します。得点を取ること（得意なプレー）にだけに「切れ」と「判断力」を使うFWや、相手のFWを完全に封じ込めるだけのセンターバックなどのスペシャリスト系<一所懸命型スーパースター>は周囲の選手たちがその選手の「一生懸命」でない部分を補える戦力があるときに成り立つし、そういう国やチームであれば指導者が選手育成の中にスペシャリスト（一所懸命型選手）だけ育てればよいという「ゆとり」が生まれるのではないかと。

残念ながら日本のようなフィジカル的にもテクニク的にも極めて優れた選手が生まれてきていない国では、チームとしてコレクティブに勝利を求めるがため、ユートイリティーな選手育成を志向し、時には「個」を押し殺してでもフォアザチームに徹する<一生懸命型選手>を育てようとするのでしょうか。また「勤勉」を売りにする労働大好き国「日本」での公的教育は、当然全ての分野に勤勉さを求める。学校内で

も掃除、授業、宿題、委員会、HR 活動など全てに優秀でないと、部活動で華やかな活動をして評価を受けない場合が多い。サッカーがスペシャリストである選手は、他のことも模範的でないといけないという指導を指導者たちは厳しく要求する。そんな文化や伝統、社会的しきたりが、サッカーの中に一所懸命のスーパースターを排出しづらい環境をうんでしまっているのでしょうか。ずるさや手抜きは「部分悪」に分類されてしまう。インターハイの全国大会のように、酷暑の中、連戦を乗り切れる精神力や体力を要求してしまう大会方式も、それに拍車をかけている可能性もある。

やはりメンタリティの似ているドイツを目指すべきなのか？育成に関してはフランスの INF 学院を模範にし、そしてパスサッカーのスペインサッカーに移行してきた。模倣することの得意な日本サッカー界が、今後どういう道を歩むのか。今回の W 杯 1 次敗退で方向転換があるのか？

いい加減オリジナリティなしでは上の階層は無くなってしまふかもしれない。産業分野では、西洋化を目指し、その模倣から最先端技術を産み出し、今や世界最高水準の経済大国となった日本。しかし、サッカー選手を自動車製品で例えるなら、燃費、バランスがよく、長持ちする大衆的自動車開発には成功しているが、世界の自動車好きをうならせるスーパーカーは作らない、といったところか。というかそれを生み出す土壌にはない。経済的リスクが優先されるからであり、趣味の世界とは違うからだ。ミラノコレクションをみていても同じような想いになる。趣味の世界やファッションショー向けの**一所懸命さ**が日本には欠けている。

日本サッカー界の進歩は誰も否定しないし、足跡も誇れるものであることは、誰も否定しないだろう。後は育成にかかっている。そしてオリジナリティを根付かせることだろう。競技力ではベースボールより野球の方が勝率が高いことを証明している日本の野球界のように。進塁打・送りバント・牽制球・セオリー野球・・・。

時に極端な育成方法が瞬間、一世を風靡する。ダイエット法のように。ブラジル体操・ラダートレーニング・体幹・2 軸動作・クーバー、戦術で言えば WM フォーメーション・アヤックス 3 4 3 システム・ゾーンプレス・フラット 3・バルサの 5 秒ルール・・・そこにかぶれすぎる指導者もまた**一所懸命**なのですね。ま

あそれぞれ一種の流行のようなもので、日本の育成に根付いているものはありませんが・・・。それでも一種の遊び心から来る一所懸命がスペシャリスト＝スーパープレーヤーを産むのかもしれない。半分教育者・半分研究者・発明家。理想も追いかけて、現実も見て。まだまだ勉強・模索です。でも文化や伝統にとらわれない「サッカー界の亀〇一家」のような指導者の出現を、指を咥えて期待してみたい気もする。「頭打ち」を打破するために。

でもやっぱり私も日本人教育者。ただただ個人的にはこの道で一生懸命型選手育成が正しいと信じていきたいし、この育成プログラムで日本にはワールドカップ優勝を果たして欲しい。もし今の指導方法で日本サッカーが世界一になれば、日本のメンタリティや育成方法を世界が見習う。努力をベースにした一生懸命型サッカーを世界各国が育成の模範となったら、極論言えば、世界平和が実現するかもしれない。サッカーを通じてサッカー選手みんながオフザピッチ全てにおいて一生懸命になれば、世界も変えられる。サッカーが世界で最も愛されているスポーツなのだから、サッカーのためなら努力できる若者は何億人といえるのだから。

でも・・・「一生懸命」やってる人には、「ずるい」ことを考える余裕（ゆとり）は得られないこともある。カリカリと仕事をしている人にジョークをかますとムツとされますしね。まさに理想と現実はかけ離れているのでしょね。「ずるい」というのがありなのがサッカーですからね。「ずる」に対抗できるのは「正義」では無理ですね。究極勝ち負けは、相手を貶める挑発行為や弱点をいやらしくつくずるさにあるのですから・・・（正義の番人＝【審判団】もだまされる世界だし）。一生懸命が馬鹿をみることもあるのがスポーツ競技です。わたしは「ずる」に対抗できるのは<経験>と<基礎の大きさ>だと。よってこの日本にいるだけではいけません。

世界には見たこともない「ずる」があるのですから。

結論！「組み合わせ」ですよ、チーム作りとは。「一生懸命」型と「一所懸命」型選手の組み合わせ！

「正義」と「ずる」の組み合わせ！ 常に仲間を信じ続ける選手と一生懸命に一相手を騙す選手！多角的・

多様な育成が出来るバランス感覚のいい指導者にならなくちゃです。考えてみたら自分もオフサイドトラップには一所懸命でした。相手のFWの集中をそらす術には一所懸命でした。いろいろなタイプ・個性の選手を相互理解の元、いいところを引き出すそれがいいコンダクターですね。

諸行無常の響きあり・・・盛者必衰の理をあらわす・・・おごれる人も久しからず。平家物語でも読み直し

てみよう。